

東南アジアの華人廟における『封神演義』の影響

二階堂 善 弘

On Influences of “*Fengshen Yanyi*” in Chinese Temples of Southeast Asia

NIKAIDO Yoshihiro

I researched influences of *Fengshen yanyi* on Chinese temples in Southeast Asia. In Singapore, I researched to fieldwork for Geok Hong Tian, Chee Seng Temple, Lian Huay Temple, Tian Teck Keng, Tian Ci Gong, Fung Huo Yuan. In Malaysia, I researched Thean Kong Thnuah, Klang Li Fu Erh Tau Tze. Some temples worships are very interesting.

キーワード：東南アジア，華人廟，『封神演義』

前 言

『封神演義』がいかに中国の宗教文化に影響を与えたかについては、筆者はすでに何度か論じている¹⁾。たとえば、東岳大帝はもともと称号のみで呼ばれることが多かった。しかし『封神演義』で「東岳大帝は黄飛虎である」とされてからは、東岳は黄飛虎の名で呼ばれることが広まった。また二郎神はもともと「李冰」「趙昱」などの名があったが、『封神演義』で「楊戩」という名であるとされてからは、多くの寺廟で「楊戩」と呼称されることになった。哪吒太子はもともと風火輪に乗ってはいなかったのだが、『封神演義』でそのように設定されてからは、輪に乗る神の代表ということになってしまった。その他、影響は至るところに見いだせる。これは中国大陸や、香港・台湾などの諸地域において共通するものである。

筆者はこれまで、中華圏をはじめ、東南アジアの諸地域に存在する華人廟について調査を行った²⁾。本論では主に東南アジアの事例に注目し、『封神演義』の寺廟への影響について論じてみたい。

1) 筆者は『封神演義の世界——中国の戦う神々——』（大修館書店1998年）においてこの問題を論じ、また筆者監訳の『全訳封神演義』（山下一夫・中塚亮・二ノ宮聡訳・勉誠出版2017年）1巻の解説においてもこの問題についてふれた。

2) 筆者はこれまで、2013年～2015年にかけて、ベトナム・タイについては数度の調査を行っている。また2016年10月より2017年9月まで、シンガポール南洋理工大学において研究員として滞在し、シンガポール・マレーシア・インドネシアの華人廟を調査した。

1. 二十四天君など

マレーシア・シンガポールにおいて、華人廟は福建・広東・海南・潮州系などに分類される。もっとも、シンガポールでは「連合廟」があるため、いくつかの廟ではその区分が曖昧になる現象も起きている³⁾。ただ、『封神演義』の影響については、ある意味ではすべての地域に共通するものなので、その点についてはあまり考慮する必要はないと考える⁴⁾。

チョン・バルー (Tiong Bahru) の近くに玉皇廟があり、玉皇殿 (Geok Hong Tian) 或いは黒橋玉皇殿と呼ばれている。1887年に建てられた廟で、シンガポールのなかでも有数の古い廟に属する。主神は玉皇大帝である⁵⁾。



シンガポール玉皇殿

この廟に二十四天君を配する。二十四天君といえば雷部の神々を並べたものである。『封神演義』においては、十絶陣において聞仲に協力した十天君、それに菡芝仙や吉立などいくつかの仙人や武将を加えて構成されている。『封神演義』における二十四天君の人員は、以下の通りである。

鄧天君忠・辛天君環・張天君節・陶天君榮・龐天君洪・劉天君甫・苟天君章・畢天君環・秦天君完・

3) 連合廟については筆者「シンガポールの華光大帝」(『東アジア文化交渉研究』関西大学東アジア文化研究科・第10号・2017年) 423-429頁を参照。

4) シンガポール・マレーシアの華人廟については、ケネス・ディーン・許源泰『新加坡華文銘刻彙編1819-1911』(広西師範大学出版社2017年)、許源泰『沿革と模式：新加坡道教和仏教伝播研究』(八方文化創作室2013年)を参照した。またさらに、「Singapore Chinese Temples 新加坡廟宇」(<http://www.beokeng.com/>)、「AngKongKeng.com」(<http://www.angkongkeng.com/>)などのサイトについても参照している。

5) 前掲ケネス・ディーン・許源泰『新加坡華文銘刻彙編1819-1911』767-778頁。

趙天君江・董天君全・袁天君角・李天君徳・孫天君良・百天君礼・王天君変・姚天君斌・張天君紹・
黄天君庚・金天君素・吉天君立・余天君慶・閃電神金光聖母・助風神齒芝仙

この天君の組み合わせは、中国大陸や台湾の廟でも見ることができる。ただ、玉皇殿の二十四天君は、この人員を基礎にして、さらに改変を加えたものであった。

朱天君（金光聖母）・孫天君（齊天大聖）・魔礼青（増長天）・殷天君（殷郊）・魔礼紅（広目天）・董
天君（董全）・秦天君（秦完）・魔礼寿（持国天）・韋陀天・李靖（托塔天王）・関天君（関帝）・楊戩
（二郎神）・趙天君（趙公明）・康天君（康席）・張天君（張節）・馬忠（華光大帝）・陶天君（陶榮）・
魔礼海（多文天）・姚天君（姚斌）・黄天君（黄飛虎）・王天君（王奕）・柏天君（柏鑑）・李天君（李
哪吒）・韋護

やや不可解な組み合わせとなっている。まずもともとの十天君として、金光聖母・董天君・秦天君・
張天君・姚天君・王天君が入っている。しかし他の天君は、『封神演義』に登場する他の人物に置き換わ
ってしまっている。たとえば、哪吒・楊戩・韋護・李靖・黄飛虎・殷郊・柏鑑がそれに当たる。そして
『封神演義』由来の四天王である魔家四将が加わっている。さらに趙天君は趙公明に置き換えられ、馬忠
も華光大帝に変わっている。柏天君も柏鑑に変わっている。これは『封神演義』では本来「百天君」で
あるのに、流布本によって「柏天君」とされてしまい、さらに活躍の機会がある柏鑑に置き換わってし
まっているものと推測される。そのうえ齊天大聖や関帝もなぜか加わっている。こちらはむしろ『西遊
記』や『三国志演義』の影響であり、『封神演義』とは関係ない。

すなわち、『封神演義』の影響とはいいながら、さらに著名な神々にこれを置き換えてしまっているの
が特徴である。このような二十四天君はかなり特異であり、非常に興味深いものである。

マレーシアのパナン島のパナンヒルに近いところに、いくつかの廟が点在している。ここに天公壇
（Thean Kong Thnuah）があり、1867年の建とされる。やはり玉皇大帝を祀るものである。

ここにもいくつかの天君があった。あるいは十二天君に近いものかと考える。十二天君も、雷部の神々
を据えるときによく見る組み合わせである。筆者は以前に、大陸の蘇州玄妙観における十二天君につい
て分析を行った⁶⁾。しかし、そのような雷部の標準的な天君と異なり、天公壇に見える組み合わせは以下
のようなものであった。

黄天化・土行孫・雷震子・哪吒・伯邑考・殷郊・金光聖母・齒芝仙・赤松子・祝融・雲中君・華光
大帝

『封神演義』からは、哪吒・土行孫・雷震子・金光聖母・殷郊・齒芝仙が加わっている。こちらは、五
行と風雨に関する神に結びつけられている。また華光大帝の姿は、こちらはすっかり楊戩の姿をしてお

6) 筆者『明清期における武神と神仙の発展』（関西大学出版部2009年）141-153頁。

り、華光と楊戩の混淆があるように思えた。それにしても、天君に星神とはいえ伯邑考が入っているのは珍しいといえよう。



天公壇の金光聖母・哪吒・伯邑考



天公壇の菡芝仙・赤松子・雷震子

2. 哪吒三兄弟と黄天化

哪吒を主神とする廟は、シンガポールやマレーシアの各所に点在する。これに比べて、その兄弟神である金吒や木吒についてはやや影が薄い。

しかしクアラルンプールの近郊、セランゴール州のクランには木吒太子廟（巴生木吒宮李府二太子・Klang Li Fu Erh Tau Tze）がある。創建は1988年で比較的新しい。ただ、規模の大きい廟である。台

湾にも木吒廟は存在するようであるが、東南アジアではさらに少ない。

この木吒太子廟の主殿には哪吒三兄弟を祀る。大太子金吒・二太子木吒・三太子哪吒と呼称される。これは一般に哪吒太子廟でもよく見られるものである。



木吒太子廟の哪吒・金吒・木吒



クラン木吒太子廟

哪吒太子については、一般に見られる哪吒廟と同じ持ち物である。すなわち、輪に乗り、火尖槍と乾坤圈を手にする。これは『封神演義』に見られるもので、大陸や台湾でもほぼ同じである。

木吒と金吒の持ち物であるが、片方が錘であり、片方が剣である。『封神演義』の物語においては、金吒は遁龍椿と宝剣を持ち、木吒は呉鉤剣を持つ。ともに主な武器は剣のはずであり、錘は持っていないはずである。しかし、台湾の廟などでも木吒或いは金吒が錘を持っている像が見られるようである。

ただ、これにも少し問題がある。錘は『封神演義』では、黄飛虎の息子の黄天化の武器とされているからである。むろん、黄天化も時に剣を持つことがあるのだが、『封神演義』の挿絵を見ていると、ほぼ黄天化は常に錘を持つ姿で描かれている。

先に見たペナン島の天公壇には、黄天化の像もあるが、その像は錘を持つものであった。

これは先に見た玉皇殿の二十四天君でも同じであり、やはり黄天化は錘を持つ。すなわち、現在の廟



天公壇の黄天化

で金吒・木吒兄弟が錘を持つのは、黄天化から移されたものであろう。おそらく、哪吒兄弟が槍と剣と錘とで、それぞれ三名が別の武器を持つようバランスを取ったものと考えられる。しかし、本来の『封神演義』の姿とはまたずれが生じてしまっている。

哪吒太子は、シンガポール・マレーシアでは「中壇元帥」「蓮華三太子」の称号で呼ばれることが多い。台湾では、中壇元帥の称は一般に広まっている。

シンガポールでは哪吒を主神とする廟はいくつもあり、チョア・チュー・カン (Choa Chu Kang) の齊神宮 (Chee Seng Temple)、アン・モー・キオ (Ang Mo Kio) の蓮華壇 (Lian Huay Temple)、タンピニス (Tampines) の天徳宮 (Tian Teck Keng)、プンゴル (Punggol) の天慈宮 (Tian Ci Gong) などが知られている。いずれも、連合廟のひとつとなっている。

台湾でよく哪吒太子の生誕日とされる旧暦9月9日は、マレーシアやシンガポールにおいては、ほぼ九皇大帝の祭りと重なるため、やや勢いが無い。また、マレーシアやシンガポールの廟では、哪吒太子は五營の主神とされるため、数多くの廟で併祀されている。



天慈宮の中壇元帥

このほか、インドネシアのジャカルタのグロドック (Glodok) の金徳院のなかにも、哪吒は主神ではないが、脇の壇をひとつ占める形で祀られている。



金徳院の哪吒太子

マレーシアのマラッカには、哪吒を主神とする廟があり、哪吒宮との額があった。脇にある神は、齊天大聖と張法主公であり、それに土地神と観音を祀る。



マラッカの哪吒宮

ただ、哪吒太子廟については、『封神演義』に由来するという性格のものではない。むしろ、なかの像の姿は『封神演義』の影響を受けている。

3. 通天教主などの三清への影響

『封神演義』で厄介なのは、どこまでが『封神演義』に基づく神仙なのか、或いはもともと存在した仙人なのか、見極めにくいことである。たとえば、『封神演義』に登場する教主のうち、老子と元始天尊は三清として、道教經典にも見られる教主である。しかし、^{つうてんきょうしゅ こうきん}通天教主と鴻鈞老祖（鴻鈞道人）については、『封神演義』オリジナルの神仙である。『封神演義』では、三清はこれとはまた別に設定されている。また接引道人のように、阿弥陀如来の設定を借りてくる場合もある。ただ元始天尊にしても、『封神演義』の場合は、やや本来の姿とは異なる形象となっている。とはいえ通天教主を神として祀るのは、これは完全に『封神演義』に由来するものなので、その点については見分けやすい。

シンガポールのマクファーソン（MacPherson）駅の近くには、菲菜芭城隍廟（Koo Chye Ba Sheng Hong Temple）など、いくつかの大きな廟が集まっている。この近くには風火院（Fung Huo Yuan）を含むパヤ・レバー連合廟（Paya Lebar United Temple）が存在する。

風火院（Fung Huo Yuan）は1963年の建になる廟で、齊天大聖廟の大聖宮（Da Sheng Kong）とともにパヤ・レバー連合廟を組織する。



シンガポール風火院

風火院という名称の場合、中国大陸などでは一般に田都元帥の廟を指す場合が多い。ただ、この廟においては、三清と同等のものとして鴻鈞道人や通天教主を祀っている。同様の現象はフィリピンにもあり、マニラの九霄大道観において鴻鈞道人や通天教主が祀られていたという記録がある⁷⁾。

このような現象は、他の地域の華人廟にも見られるものであるが、他の『封神演義』の影響と比しても興味深いものがある。

7) 坂出祥伸『道教と東南アジア華人社会』（東方書店2013年）158頁。ただ、現在は通常の三清に置き換わっているようである。